

アサ子ちゃんはがんばれない

『ハッピー・デイズ ハッピー・エンド/デプレッション・デイズ デプレッション・エンド』

著者／流遠亜沙

BLASTER-SHIFT 文庫

衝動的に髪を切りたくなる時がある。

美容院には行きたくない。

場違いな感じがして居心地が悪いし、いかにもリア充然とした、お洒落な店員に話しかけられるのが苦手だ。気の利いた受け答えなど出来ないし、共有出来る話題もない。

だから髪を切る時は自宅のバスタブ。無造作に縛って、適当な位置で切り落とす。専用のハサミなど持っていないので、切りにくいが仕方ない。

——じゃきん。

ハサミの刃が閉じると、束ねた髪が房ふさになって落ちていく。

意外と髪というのは重いので、切り落とすと、少しだけ頭が軽くなる。

心なしか、少しだけ気分も軽くなった気がする。

だが、それも一瞬——備え付けの鏡が視界に入ると、また気分が落ち込む。そこに映っているのは、三十路手前の冴えない女の顔だ。

あたしは自分の顔が好きではない。

もう少し可愛ければ、もっと自分に自信が持てただろうか？

もう少し綺麗だったら、もっと自分を好きになれただろうか？

そんな詮せん無い事を考える。

しかし——答えは、否。

どんなに見てくれが変わるうが、あたしの本質は変わらないだろう。

自己評価ではあるが——あたしの性格は最悪だから。

最悪で、最低で、どうしようもない。

だから、あたしは鏡に映る冴えない自分に吐き捨てる。

「……………死ねばいいのに——」

『ハッピー・デイズ ハッピー・エンド』

いつもの事ではあるが、あたしの一日は憂鬱な目覚めから始まる。あたしは極度の低血圧で、起床という行為が苦手——いや、嫌いだ。

目が覚めるたびに死にたくなる。いつそ世界が滅んでしまえばいい。そうすれば起きる必要もない。

そんな事を本気で考える。

馬鹿な事と思うかもしれない。こればかりは同じ悩みを抱える人間でなければ判らな
いだろう。だから、理解してもらおうとは思わない。しよせん人間は、自分で実感出来な
い事は理解出来ない。

他人の気持ちなどは、そのもつともたるものだ。

考え方が、価値観が、違うから。

「……………死のうかな」

本日の第一声——いただきました。

今日はいつになく気分が最低だ。

理由を数え上げればきりが無いが、一つ挙げるとしたら、季節のせいだ。今は冬。

——冬が来ると、訳もなく悲しくなりません？

壁に貼ってあるカレンダーが目に入る。今日は十二月十五日。もうすぐ二〇一三年が終
わる。

来年の春には三十歳になる。これも気分が落ち込む要因の一つだ。

「三十歳、嫌だなあ……」

子供の頃は大人になった自分の姿が想像出来なかった。特に夢もなかったし、やりたい
事もなかったから。

それでも、子供の頃の自分が、今のあたしを見たら絶望するだろう。人として最悪の一手前——それがあたしの現状だから。

「高校卒業して、もう十年か……」

思えば、あの高校を選んだ事が、あたしの人生のケチのつき始めだったのかもしれない。

高校の三年間は——最悪だった。

クラスに馴染めないだけなら、存在しないものとして、ひっそりと過す事も出来ただろう。同窓会で名前が出て『そんな奴いたっけ?』扱い。むしろ望むところだ。

だが、あたしはクラスメイトの一部と険悪で、影のように過す事も出来なかった。実害こそなかったが、絡まれる事はあった。

あたしは気が弱い方ではなかったが、かといって、心が強い訳でもない。他人に悪意を向けられるのは、高校生のメンタルには辛い——それは今でも変わらないが。

学校は小さな疑似社会で、居場所がない者にとって、そこは生き地獄と呼んでも過言ではない。だから、あたしに悪意を向けてきたクラスメイトを、脳内で惨殺するくらいは許してほしい。

それでも三年間耐えられたのは、大学に行きたかったからだ。近場の高校に進学せず、電車通学をしてまであの高校を選んだのは、大学への進学率が高かったから。あたしは、かなり早い段階で、高校生活は大学進学のために捨てる事を決めた。

結果的に福岡の大学への推薦をもらい、無事に合格。卒業を控えた三年の年末年始は、悠々と過ごしたのを覚えている。最悪の高校生活が報われたのだ。

余談だが、あの年の卒業生で、もつとも卒業を喜んでいたのはあたしだろう。大学に合格出来た事もそうだが、二度とここに来なくていいのだから。同級生と顔を合わせる事もなくなるし。

卒業式で泣いていた生徒とは、恐らく、まったくの真逆の心境。彼等とは一生理解し合えないだろう。

仮に同窓会があったとしても、あたしは絶対に行かない——あいつらの顔は二度と見たくない。今となつては、もう思い出せもしないが。

ともあれ、鬱屈とした高校生活は終わった。

ここからが本当のスタートだ——そう思っていた。

大学生になれば、人生はバラ色だ。何のためにあるのか判らない校則もなく、煩わ^{わづら}しい人間関係もない。それだけで心が躍った。

二〇〇三年四月。あたしは大学生になった。
しかし――

「結局、そんな事なかったのよね……」

確かに大学は楽だった。クラスという括りがなかったため、グループや派閥はばつが生まれる事もない。必要がなければ、誰ともコミュニケーションを取らなくていい。知己おも居らず、サークルにも入らなかったため、当然のように友人は出来なかった。

大学には講義を受けに行くだけで、キャンパス・ライフと呼べるものではなかった。

それに不満があった訳じゃない。だが、満足も出来なかった。完全に自業自得じごうじとくだけど。

結果――二年の夏休みを迎える前に、あたしは大学を中退した。

明確な目的があった訳じゃない。やりたい事など見つからなかったから。

それでも、現状を変えたいという焦りのようなものがあった。

今思えば、冷静に自暴自棄になっていた。

あたしはあの時――人生を投げたのだ。

それからは余生じゆうせいだと思おう事にした。

ダメだったらそれまで。

だが、それを親に言うほど親不孝な事もない――思っている時点で充分に親不孝だが――と判っていたから、それらしい理由を告げて、大学を辞めた。

「今更だけど、本当に親不孝な事したな……」

二〇〇四年七月。あたしは東京に出た。

理由は……あまり思い出したくない。

ともかく、東京での暮らしが始まった。

ここからは凡コメントになるが――まあ、色々であった。

そして、いつしか心を病んだ。

『鬱うつ』だと診断された。

二〇〇八年七月。あたしは療養のために実家のある宮崎に帰った。

上京して、ちょうど四年が経っていた。

「鬱だって、笑っちゃうよね……」

あたしの場合には気分変調症で、軽い鬱状態が長く続くというものらしい。

現代において鬱は、そう珍しい病ではない。

だが、まさか自分が罹るとは思いもしなかった。とかく人生は何があるか判らない。

ともあれ、それから約一年半の実家暮らしが始まった。

心療内科に通い、それ以外の時間は自宅警備員。働きもせず、家事も母親がやってくれるのだから、あたしは何もしなくてよかった。やる事といえば、せいぜい、夕食後の愛犬の散歩くらいだ。

そんな生活も、さすがに一年が経つと変化を求められる。

具体的に言うと、『社会復帰しろ』という親からのプレッシャーだ。

やむなく数年ぶりにバイトをしたが、結果だけを述べると——駄目だった。

段々と実家でも居心地が悪くなってきた。

バイト出来ない。就職などもってのほか。

そこで考えたのが専門学校だった。駄目元で小説家を目指してみようと思った。とにかく実家を出たかったというのもある。

「でも——それも結局、ただの時間稼ぎ……」

二〇一〇年三月。あたしは再び、東京に住む事になった。

専門学校に通うためだ。

これで三年の猶予期間が出来た——そう思っていた。

四月になり、授業が始まる。

大学時代の反省を活かし、最初の数ヶ月はテンションを上げ、がんばって人当たりの良いキャラを演じた。

しかし、しよせんは付け焼刃。メッキはやがて剥がれる。

結局、特に親しい友人は出来なかった。

「痛いなあ——あたしって、ほんとバカ……」

二年生になると、ほとんど授業にも出なくなった。授業を受けたところで、小説家になれるとは思えなかったから。

あたしは担任と相談し、学内のカウンセリングを受け、課題をこなす事で単位を取得出来る制度を利用し、卒業する事を当面の目標とした。

「また問題の先送り。みつともないったら……」

時は流れ、あたしは単位を取得し、専門学校を卒業した。当然のように就職活動などしてない。

二〇一三年四月。学生という免許符を失ったあたしは——無職になった。

思いきって受けたバイトの面接に落ちた。初めて投稿した小説の新人賞も落選。

六月頃から精神的・肉体的に不調おちいに陥る。

「……あの数ヶ月間は最悪だったな」

ほとんど何も手に付かなかった。文字通り、死んだような日々だった。持ち直したのは九月頃だったと思う。

あたしは考えるのをやめた。思考の放棄だ。

あのままでは、静かに気が狂いそうだったから。

あれからまた時間が経ち、もうすぐ今年も終わろうとしている。

「どうしようかな、これから……」

考えても妙案など浮かばない。時間の無駄だ。

下手の考え休むに似たり。

こういう時に取るべき手段は決まっている。

「……………寝なおそう——」

現実逃避。

戦略的撤退。

自分を守るための積極的自衛権の行使。



……使い方が間違っている気もするが、どうでもいい。

眠ってしまえば何も考えなくていい。

まどろみに落ちる時、いつも思う。

眠っている間に世界が終わってしまえばいい。

それが叶わないなら――

「もう、目が覚めなければいいのに……」

『ハッピー・デイズ
『幸せな日々』など望まない。

あたしには、そんな資格がない。過ぎた願いだ。

それでも、もしも許されるのなら。

願い事は、ひとつだけ――

『ハッピー・エンド
『幸せな終わり』だけあればいい。

Continue? (訳: 続けますか?)

Yes/No (訳: はい/いいえ)

.....
.....
.....

↪No.

The deliberation by the system. (訳：システムによる審議中)

.....
.....
.....

Your command has been rejected. (訳：貴方のコマンドは否決されました)

Forces continue. (訳：強制続行します)

Successful re-boot the system. (システムの再起動に成功)

Have a nice day. (良い一日を)

「まだ、生きてる……」



『デプレッション・デイズ デプレッション・エンド』

目が覚めれば見慣れた天井。

今日も今日とて、目覚めの気分は最悪で。

もう長いこと、気持ち良く目が覚めた記憶がない。

「……………」

低血圧のあたしは、意識が覚醒しても、しばらくは何も出来ない。ただ、ぼんやりとした頭で、益体もない思考を巡らせる。内容は本当にしようもない事から、人はなぜ生きるのかといった哲学っぽい何かにまで及ぶ。もちろん、そこには整合性などない。レポートにして学会に発表しても、誰も見向きもしないだろう。

古いぼんこつのパソコンと同じ。起動するのに時間がかかる。

学生時代は、朝食を食べる暇があるなら少しでも寝ていたかったから、ぎりぎりまで寝て、起きたら着替えて、しばらくぼーっとして、朝食抜きで登校が当たり前だった。

今思えば、育ち盛りの若者が昼食まで何も口にせず、よくもったものだと思う。

あの頃は当たり前実家で生活し、当たり前前に家事をやってくれる母親がいた。

「……………欲しいなあ、メイドさん」

ロングスカートにエプロンドレスのビクトリアン・タイプは基本だろう。ミニスカなど邪道だと思う。あの浪漫あふれるコスチュームで、おはようからおやすみまで甲斐甲斐しくお世話されたい。

家事は面倒くさい。やらなくていいなら、やりたくない。

だからメイドさんが欲しい。

ご奉仕とかしてほしい。

「……………馬鹿じゃないの、あたし」

ようやく頭が回りだした。くだらない思考をやめ、しかし起床する気分にもなれず、だらだらと時間を浪費する。

ふと、壁に貼つてあるカレンダーに意識が向いた。

今日は二〇一四年三月十五日。

今年度ももうすぐ終わる。

もつとも、あたしの生活は何も変わらない。

年が変わって、何か変化があるかもしれないと思っていたが、変えようとしないうちに限り、何も変わりはない。

結局は現状維持。

もう、変えようという気力がない。

もう、変えたいという欲求もない。

このまま、行ける所まで行くしかない。

「……別にいいか。しよせん、余生だし」

もう、色々な事が面倒くさい。

もう、色々な事が煩わしい。

「……どうでもいいや」

『憂鬱な日々』は続いていく。

あたしには、それしかない。

だったら、もう、高望みはしない。

『憂鬱な結末』でもいい。

終わりが来るなら、それでいい。

あとがき

どうも、アサルト改め、流遠^{るとおあさ}亜沙です。

『アサ子ちゃんがんばれない ハッピー・デイズ ハッピー・エンド/デプレッション・デイズ デプレッション・エンド』をお届け致します。

この作品は昨年の最後に発表した『ハッピー・デイズ ハッピー・エンド』に、『デプレッション・デイズ デプレッション・エンド』と繋ぎのパートを加えたものとなります。『ハッピー・デイズ』はほぼ手を加えていません。

以前のあとがきでも書きましたが、この作品について言う事はありません。解釈は読んでくださった方にお任せします。

なお、アサ子ちゃんというのは本作の主人公の名前です。誕生日を目前に控えた二十九歳独身のイタい女の子です。

さて——旧サイトを閉鎖し、仮営業所を経て、現在は新サイトがプレオープン中です。『ハッピー・デイズ』を発表した時点では、三月まではネット上での活動をやめ、気持ち次第で新たな活動を始めるつもりでした。ですが、ありがたい事に、旧サイトの閉鎖を惜しんでくださる方が数人とはいえ居てくれました。中には社交辞令として言ってくれた方もいらつしやるかと思いますが、それでも嬉しかったです。

なので、とりあえず仮営業所を作り、ブログをメインに細々と活動を続けていました。そして段々と、少しずつではありますが、創作活動を再開したい気分になりました。

はい——二〇一四年四月一日より、新サイトを正式オープン致します。

サイト名『局地戦用強襲型機動兵器・改』(<http://assault.xxxxxxxx.jp>)

とはいえ、僕自身が危うい状況である事に変わりはなく、急に続けられなくなる可能性がある事だけはお伝えしておきます。

不安定なサイトで申し訳ありません……。

それでは良きところで謝辞に移らせていただきます。

ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。こんな小説とも呼べない文章を最後までお読みいただき、ありがとうございます。

僕の作品は基本的にこういう方向性です。これしか書きませんし、書けません。これをやめたら、僕が書く必要性もないわけです。

それでもいいという方は今後も僕の趣味に付き合ってください。

現実には知らない所に。

夢は現実の中に。

そして、真実はその心の中にある。

……なんつって。

2014 / 3 / 13 流遠亜沙

『アサ子ちゃんはがんばれない』ページに戻る